

る。(菊版本三八五頁、索引一頁、中文館書店發行、定價金三圓五十錢)〔林屋辰三郎〕

### 近世日本の儒學

#### 徳川公繼宗記念祝賀會編

斯文會は、明治初期より大正・昭和を通じて儒教精神の再認識を行ふことに於て、止まる所を知らない衝動的な西洋文化の許容に對しては、一つの東洋的な反省と制御の役割を果して來たのは人の認むる所であらう。本書はその斯文會に偉功ある會長徳川家達公の瀧宗七十年を、最も意義深い方法に於て慶祝記念した論文集で、主として斯文會員の手に成るものである。本書編纂の目的意義は「公の祖宗の功績を顯彰する所以」と共に、又實に現代日本の礎地を明確にする所以(同副會長坂谷芳郎男「序」)である。からである。實に徳川公を祝賀するにふさはしい記念出版物たるに止らず、現今しきりに東亞の諸問題が原理的に問はれつゝある時に當つて、一つの大きいなる收穫を加へたものと云はなければならぬ。

本書に就いては既に肥後和男氏の優れた紹介・批判があるが(『社會經濟史學』第九卷第九號)煩をいとはず、少しく氣づいた點を捕足しつゝ、概要の紹介を試るであらう。

×

四十八篇の論文は四部に分類されてゐる。題目と執筆者の芳名を掲げるならば(數稱略)

紹介

總説(總論)井上哲次郎)……(假りに第一部とする)

徳川幕府と儒學(家康と儒學)山口察常、「綱吉と儒學」加藤虎之亮、「吉宗と儒學」平野彦次郎、「林家と文教」中山久四郎、「水戸學(初期)」徳川慶光、「水戸學(後期)」藤澤誠、「松平定信を中心とする諸侯の教養」松平定光、「寛政異學の禁」諸橋轍次、「幕末の儒學」芳野幹一、「聖堂と昌平坂學問所」近藤正治、「紅葉山文庫の沿革」濱野知三郎、「諸藩の文教一般」天江文城)……(第二部)

諸家の學風・特色(藤原惺高の學的態度)太田兵三郎、「林羅山と本朝通鑑」平野彦次郎、「藤樹と蕃山」柴田甚五郎、「山崎闇齋と其の教育」阿部吉雄、「山鹿素行の一面」小柳司氣太、「木下順庵と新井白石」澤田總清、「伊藤仁齋の一考察」宇野哲人、「淺見桐齋の大義名分論」坂井映三、「室鳩巢と朱子學」鈴木直治、「荻生徂徠に關する二三の考察」鹽谷温、「三浦梅園の學風と南豐の儒學」高田貞治、「細井平洲の學德」高瀨代次郎、「佐藤一齋の貌神」林竹次郎、「頼山陽の史筆」鹽谷温)……(第三部)

江戸儒學の諸問題(神道と儒學)飯島忠夫、「儒學と國文學との關係」久松潜一、「關學と儒學との交渉及び幕府の對關學政策」板澤武雄、「折衷概括」佐藤文四郎、「考證學概説」中山久四郎、「薩摩の儒學」山田琢、「南學の特質」小林信明、「京儒の學」中山久四郎、「大阪の儒學」藤澤章次郎、「徳川時代の漢文學」(其一章)佐久節、同(其二詩)前川三郎、同(其三、支那語學・支那俗文學)齋藤護一、「江戸時代儒學者の書」高野辰之、「江戸時代の儒

第二十五卷 第二號 一二九

學と繪畫「瀧精一」、「江戸時代の孔子廟建築」飯田須賀斯、「石門心學に就いて」熊坂圭三、「漢學を主としての私塾」高成田忠風、「江戸時代に於ける年號の典故と經書」森本角藏、「漢字の訓解と校勘の學」岡井愷吾、「江戸時代の叢書刊行」濱野知三郎、「日本經解に就いて」内野台遺……(第四部)

本書を通覽するに、歴史の解明に於て缺く所多いのは讀者の齊しく感ずる所であらう。又書名の示す如き『近世日本の儒學』は「近世の」と「日本の」と云ふ三重の限定を蒙つてをる。従つてこの儒學の一體如何なる所に近世的性格があり、又如何にして近世を指導したか。而して何處に日本的な様相を認め得るかを求心的に究めんとする意識が常に働くのでなくては、その書名は單に所收論文の最小公倍數的な名稱に終らざるを得ないであらう。肥後氏は此點歴史の社會的基礎への考察の不十分と、世界的哲學的理解の缺乏を鋭く指摘されたが、これは本書への最も重大な批判であると同時に、かへつて未だ儒教の歴史學的研究に多くの業績を示してゐない歴史家側への要請と鞭撻の言葉であると考へる。凡そ思想史研究の困難は、先づ思想史の對象としての難解な思想そのものの的確な理解を第一とし、同時に思想が歴史的な存在である以上歴史的な在り方を究めなければならぬ點にある。兩者相俟つて思想の全姿を鮮明になし得るのであるが、この學的操作を一人で處理することは不可能に近いのである。今主として斯文會員の手に成る本書は、その方法に於て前者に偏屬することは已むを得ないのである。従つて再び歴史的研究の不在を責むることをやめて

本書自體に於てその價值如何が問はれなければならぬ。

×

先づ編纂の方法が非常に優れてゐるのに敬服の外はない。唯少しく言を挾むならば、白石は純粹な儒者、即經學者として(第三部)に入れるよりは、(第二部)に於て定信と比較されつゝ、その儒學的教養が、幕府當局者・政治家としての面に如何様に働いたか、問題にさるべきではなかつたらうか。(第三部)に於ては極めて制限された紙數に、各儒の全面を追ふならば、かへつてその特色を見失ふ懼れなしとしないのであるか、執筆者の大部分は、最初から各儒の特色と考へられる點を把へて、學風を浮び上らせやうと努めたのは、成功であつたと思はれる。(第四部)では神道・國文學・蘭學以外に儒教と基督教及び佛教に關する重要な問題に觸れてゐないのも、儒教の思想的な周邊を考へることによつて、已れ自身の特質を明かならしむる上に不可缺と考へられるが故に惜しいと思はれる。それは儒教が政權にからんでゐるのに便乘して單に政治の命ずる思想對策的な見地からのみ佛教や基督教との關係を取扱はれるべきではなくて、思想自體が強烈に自己を主張して内燃する烟と烟の強さを見るべきであらう。

尙各儒の著書を列舉し又解題を附した論文も見受けられるが、それは我々が別に『羣述叢書』その他の解題書を座右にすれば足りることであり、それよりは各儒に關する明治以後の優れた論著を參考文獻として列舉すれば、儒學に關する先人の諸勞作が本書に參加して出版の意義を深め、且つ本書の利用價值を倍せしめたで

あらう。

×

肥後氏は「水戸學(前期)」、「寧鷗巢と朱子學」、「荻生徂徠に於ける二三の考察」、「江戸時代孔子廟建築」、「徳川時代の漢文學(其三)——支那諸國支那文學等の諸編と注目すべき點を明快に指摘しつゝ、賞揚せられたが、猶數篇を附加することを許して頂きたい。

幕末掉尾の明君と云はれた吉宗の政治が、如何に儒學に負ふ所多いかを詳細に論ぜられた「吉宗と儒學」は、政治と學問の結合を考ふる上に示唆多いものであらう。併しそれにも拘らず何故に儒學が吉宗を界として政治から離れなければならなかつたかが次に來る問題であらう。

後期水戸學の中心思想を正石主義から經儒一致の道が如何にして「弘道館記」に迄發展したかを簡潔に捉えた藤澤氏の論文も、前期水戸學と併せて興味深いものである。

次に、定信の許に到來した齋蘭『禮樂集』に據つて、定信並びに諸侯の學問的教養を明かにせんと試みられた松本氏の論文は未發表の資料を公開せられた點のみに於ても貴重なるものであるが「その取扱ふ時代理念を確實に把握すること云々」「時代と人とを有機的に把握せんとする意圖」を貫いて時代と人との相即關係に設き及ばれたならば、一層の重みを加へたであらう。筆者松平氏の「松平定信の文教政策研究」に於て折角の方法論的反省が具體的に示されんことを期待してやまぬ。

太田氏は近世儒學史上に於ける惺惺の意義は、中世的傳統を打

破して、文藝復興期の源流をなした點にあるが、彼が學理の確立者としてよりは、寧ろ學的態度の決定者としてこの榮譽に與つてゐるとする視點に立つて「藤原惺惺の學的態度」を堂々と論ぜられた。又彼の固陋偏執に陥ることのない汎宋學的立場を述べ、かゝる學的態度は羅山よりも寧ろ松永尺五に傳へられたことを指摘されたのも傾聴に價すると思ふ。

合理主義的な一面を導入した儒學の教養が、日本人の洋學理解の素地となつたことは誰しも疑ふ所ではないが、蘭學と儒學との交渉について、具體的な考察をめぐらされた板澤氏の實證的勞作は高く評價さるべきであらう。又對蘭學政策に就いては、新たに發見された『厚生新編』の稿本に據つて、幕府がこの譯述事業に意外の熱意を示してゐることを教へられた。

近世日本儒學の父と仰がれた惺惺に開花する儒學が、それ以前に如何なるつながりがあり準備があつたのであらうか。「薩摩の儒學」を識ることはこの問題を解く一つの鍵である。既に獨立の氣構えを見せた儒學が、僻陋の地薩摩に生長し、藩主島津氏の政治に結びつけられてゐたのであるが、その事實を確實な筆致を以て解説された山田氏の論文も必讀のものであらう。

以上思ひの儘に甚だ散漫な紹介に終つたが、茲に觸れることの出来なかつた各篇も何等かの意味で學界へプラスを贈つてゐるに相違なく、儒學研究に志す者が必ずくゞらなければならぬ門として、永遠に尊へ立つであらう。(菊列左文千百四十九頁、挿入寫眞四十數葉、東京岩波書店發行、定價七圓五十錢)(龜井伸明)